温泉番付について

木暮金太夫

温泉マニアでなくても温泉に少しでも関心のある人なら、「温泉番付」（温泉効能鑑）といわれれば、すぐにそのイメージが思い浮かんでくるであろう。現在でも、温泉医学書や温泉PR誌に、しばしば見かけることができる。

江戸時代の温泉関係書においては、全国的に多数の温泉についてその名称および適応症を記載したものは少なく、一覧表の形式を取ったものはこの温泉番付以外、皆無に等しい。したがって、温泉番付が民間の戯作にもかかわらず、後世、各方面に広く利用されるようになったのであろう。

ここ数年来、温泉医学の分野でも適応症の問題が論議されているが、その一環として伝説的ないしは経験的な温泉適応症も検討されて当然である。このような見方から、温泉番付の収集と整理を心がけてきた筆者は、今回、現存する温泉番付を調査し検討を試みたので、その結果について述べてみたい。

かつて藤浪剛一博士は、「温泉番付は民間の戯作であるが、温泉の選択順位には誤りが少なく、番付の上位にあるものは古代からの名湯である」という趣旨のことを述べている。では、江戸時代のいつごろからこのような試みが始められたのであろうか。

この点について、今回調査したうち年代の明らかな最古のものは文化十四年の番付であった。温泉番付以外にも江戸時代から流行した愛古銭家相撲番付（寛政年間）、日本持丸長者鑑（天保年間）など、同形式の番付仕立てのものがみられる。そもそも、温泉番付がその範をとった相撲番付が、相撲起顕（天保年間）なる書に掲載されている相撲番付（安永三年版）にまで遡れること、さらに寛政のころ大相撲が隆盛を極めたことなどから、温泉番付もその作成の上限を安永年間ないし寛政年間とみてよいのではなかろうか。いずれにしても、江戸中期より後期にかけて流行し、明治末期まで各地で出版されたである（ただし、草津温泉では現在でも続けられている）。

温泉の選択順位決定の基礎となったものは、疾病に対する効能だと考える。これは、温泉が療養中心的であった時代に当然のことであろう。反面、享楽的要素も順位決定にある程度影響を及ぼしていたことも否定できない。ともあれ、草津、那須など作用の強い温泉、あるいは古くから開けた温泉などが庶民に印象が強く、そのため上位にランクされたものであろう。

特に草津では東大関の最高位（江戸時代、相撲の最高位は大関で横綱はなかった）であることを誇りとし、今日に至るまでこの番付を宣伝に利用し続けている。これに対して西の大関有馬では、草津よりさらに古い歴史を有しているにもかかわらず、温泉番付についてはあまり関心を示していない。

東西の分け方は関東を境に「東之方」「西之方」に分けているが、下位になるとこの分類に従わない番付もある。温泉地の名称に関しても、当て字が使用されている場合が多く、例えば江戸時代の番付で、常に東前頭三～四枚目に位する伊香保のごときは「湯川尾」と

なっていたり、四万が「島」、修善寺が「朱善寺」、下呂が、「下郎」、城崎が「木の崎」、道後が「堂古」などがみられる。

このように当て字が使われたり、温泉地の重複などが見られるのも、交通不便な時代に作者が個々に温泉を確認することなく、口伝えや不完全な温泉案内書などを参考にしたためであろう。また、江戸時代の番付に名を連ねているが、現在は変名してしまったもの、上位にランクされていたが衰微してしまったもの、さらには消滅してしまったものなどあり、現在と比較してみると非常に興味深い。

番付は最初、どこで作られたのか。この点も明らかでないが、今回の調査で判明した出版地は東京（江戸）、京都、群馬、栃木、福島などであり、特に草津のものが圧倒的に多いのが注目される。また、番付によっては、その出版地や近郊の温泉を有利に扱っている。

大きさは大小種々、形式に関しても多彩である。色は、江戸時代のものはほとんど黒一色、明治のものには色彩をほどこしたものが二、三見られる。

掲載温泉数は、江戸時代の番付で九四から一〇〇の範囲、明治で一〇〇以上、多いもので四〇八もの温泉地を挙げ、北海道や沖縄の温泉地の名もでてくる。

各温泉の適応症については、私は当初、番付によってかなり変わっているのではないかと期待していたが、江戸時代の番付に記された適応症は、予想に反してほぼ同じであり、総数も二四ないし二五で思ったより多くない。明治になると、掲載温泉数の増加とともに適応症も増加していく。

以上のように、民間の戯作とはいえ、温泉番付は江戸～明治の温泉地の状況を今に伝える、貴重な文化的資料といえるのである。

諸国温泉功能鑑（墨摺）